【資料】

福岡看護大学における短期海外研修の成果報告 2019

Report on Results of Short-term Overseas Training at Fukuoka Nursing College 2019

宮坂啓子 [1)] 窪田惠子 [1)] 大久保つや子 [1)] 岩本利恵 [2)] 宮園真美 [1)]
森中惠子 [1)] 晴佐久悟 [1)] 大城知子 [1)]

1）福岡看護大学　看護学部　看護学科 国際交流推進委員会委員, 2）福岡看護大学　看護学部　看護学科 健康支援看護部門

抄　　録

この研修の目的は、日本においては体験できない多文化社会における人々の暮らしと、看護における文化（異文化）理解の重要性を自ら体験し、看護先進国であるオーストラリアの看護の実際を学ぶことを目的として、開学 2 年目に、本学が初めてオーストラリアでの海外研修を実施した。ここに、研修の成果を報告し、今後の研修への課題を検討する。

研修参加学生は 12 名で、研修前の学内でのオリエンテーション、モナッシュ大学での講義、病院見学、看護学生との交流等を体験した。海外研修終了後は、学生アンケート調査を実施した。事前オリエンテーション（3 項目）については、全員の学生が理解できていた。6 回の事前オリエンテーションとスカイプを使ってモナッシュ大学の日本人教員と直接話す機会を設定したことが効果的であったと考える。また、全体の研修期間については、11 名（92%）の学生が「短い」と感じており「もっといたかった」という意見も見られた。研修内容（7 項目）は、全ての項目で「満足だった」という回答が多かった。理由として、学生が日々過ごす中でホストファミリーとの会話が増え、各自の英語力に自信がついたのも一つであると考えられた。

研修内容は日本と比較しながら医療・文化についてなど学び、他文化を受け入れることに抵抗が無くなったとアンケートに書いた学生もいた。また病院・緩和ケア病棟の見学など研修内容がバランスよく企画されていたと考える。 課題としては、ホームステイ先に帰宅後は直ぐに連絡を入れること、事前調整を十分にしていてもホストファミリーとの情報交換を綿密に取っておく必要があること、ホストファミリーの高齢化を考慮して、学生の休日の過ごし方を検討しておく必要性があることなどが挙げられた。

キーワード: 海外研修, 多文化社会, 看護における文化, 英語コミュニケーション

は　じ　め　に

高等教育において国際化やグローバリゼーションが推進されている中、本学における海外研修は、開学 2 年目で初めて取り組むこととなった。

ここでは、研修の目的、内容、アンケート結果を中心に報告し、今後の海外研修をより有意義なものとするために課題を検討する。

Ⅰ．研修の目的

日本においては体験できない多文化社会における人々の暮らしと、看護における文化の理解の重要性を自ら体験し、看護先進国であるオーストラリアの看護の実際を学ぶことを目的とする。

1. 異文化環境の下で、対人コミュニケーションを円滑に進める基盤となる社会性や協調性、相手側の置かれている状況に共感する力を養う。
2. 看護先進国であるオーストラリアで現地の看護・医療・福祉の実際を学ぶ。
3. 保健・医療・福祉システムの異なる国における保

健医療ニーズや健康問題について考え、その国・地域で必要とされる看護の役割・機能を考察する。

Ⅱ．研修の概要

１．参加者

学生：2年生7名、1年生5名、教員1名
引率教員:2名

2. 研修期間

平成31年3月5日（火）～3月15日（金）の11日間

3. 研修場所

オーストラリア　モナッシュ大学　ペニンシュラキャンパス。モナッシュ大学は、1958年に設立された大学である。現在、約51,000人の学生が在籍しているオーストラリア最大の大学で、オーストラリア国内に6つのキャンパスがありその中のひとつにモナッシュ大学ペニンシュラキャンパス（Peninsula Campus）がある。

Ⅲ．研修内容について

１．講義

講義は、モナッシュ大学の看護学科　下稲葉先生（講師）がコーディネーターとなり以下の内容で進められた。

1）英語レッスン（1回目）

看護師の資格をもっており、語学教育に精通している Rhondda Millar 先生よりオーストラリアの日常生活に役に立つ英語表現やあいさつの方法、ホームステイ先で良く使う英語、買い物時に役に立つ英語などの授業を受け、日常で使用する英会話を学習した。

a)ロンダ先生と研修参加者

2）オーストラリアヘルスケアシステムについて

オーストラリアはユニバーサルヘルスケアが比較的達成されており、プライマリケアおよび総合診療医（GP）システムを持つ。外来診療の一部補助と、入院治療の全額は国が補償する。原住民を含む国民への保健、医療、福祉に関してなど、オーストラリアのヘルスケアシステムについて以下の内容の講義を受けた。

①オーストラリアについての一般知識
②オーストラリアの人口
③オーストラリアの人口増加
④移民はどこから来ているのか
⑤年間の移民率
⑥オーストラリアの医療
⑦政府システムについて
⑧ヘルスシステム（連邦政府）
⑨ヘルスケアシステム（州政府）
⑩地方自治体と地域サービス
⑪オーストラリアの受診システム
⑫ヘルスケアのタイプ
⑬オーストラリアの健康
⑭平均寿命国際比較
⑮主な死因
⑯オーストラリアの医療の挑戦
⑰高齢化社会
⑱医療費の増加と医療費の国際比較
⑲オーストラリアの遠隔地
⑳糖尿病のタイプ、多い居住地
㉑年齢別自殺、自殺率
㉒オーストラリアのナース
㉓医療者の世界分布

3）オーストラリアの文化について

オーストラリアは国の伝統や文化をしっかり残していこうと、原住民のアボリジニを保護し、その文化や伝統を大切にしていることを理解した。また、文化と健康、ワークショップアクティビティーを柱に生活することと文化などを含め以下の内容の講義を受けた。

①文化について
②文化の定義
③アクティビティー
④文化の特徴
⑤自由民族中心主義
⑥健康の定義
⑦文化と健康
⑧健康に対するモデル

⑨生活することと文化
⑩病気になること、治療、回復と文化
⑪死ぬことと文化

4）英語レッスン(2 回目)

英語レッスン(2 回目)に、学生は「キャンパス内にいる学生に英語でインタビューをするアクティビティー」の課題を指示され、実施した。その後、インタビュー内容や、どのように自分たちが話をしたかについて発表し、インタビューする内容や質問の方法、回答方法についてロンダ先生より指導を受けた。

5）緩和ケア講義

緩和ケアの語源は Hospitium=暖かくもてなすという意味で、「QOL はその人が定義するもの」という講義から始まり、「生きる」を支えることを中心に、オーストラリアにおける緩和ケアと日本の緩和ケアの現状を双方の視点から以下の内容の講義を受けた。

①全人的ケア
②緩和ケアの定義(語源)
③緩和ケアの歴史
④緩和ケアの理念
⑤緩和ケアのモデル
⑥緩和ケアに対する誤解について

最後に、「緩和ケアは死ぬための医療ではない」という教えを受けた。

b)モナッシュ大学キャンパス

c)フランクストン病院の外観

6）緩和ケアに対するグループワークのまとめ

緩和ケアにおいて学生がグループワークを行った。「自分のケアが必要になった時、このような看護師にケアしてほしい」を題目に、グループで考えた看護師像を広用紙に絵を書いて分かりやすく、それぞれの考えを説明した。看護師として人を全人的にみるということも含めて考えることができたと学生の意見があった。

7）死と生についての講義

下稲葉先生のこれまでの体験を含め、事例をあげながら生と死についての講義が行われた。

①生と死について
②死に対する姿勢
③現代社会における死について
④1 人称、2 人称、3 人称の死について
⑤死について考える
⑥死に関わるとき

8）文化と看護についての講義

オーストラリアは多民族国家であるため、他者の文化を理解するには、自分自身の文化を理解する必要がある。また、文化の違いが健康に対する考え方にどう影響しているかなど講義を受け、各グループで討議した。他に以下の内容を講義受けた。

①オーストラリアにおける文化の多様性について
②日本に訪れる外国人・在留外国人の数
③外国人患者の受け入れ状況
④食事、入浴などの文化の違い
⑤多様な文化の中での医療の提供
⑥医療の挑戦
⑦異文化看護
⑧文化的な能力
⑨文化的な能力のための 3 つのプロセス（文化的認知、文化に対する繊細さ、文化的安全）
⑩文化的能力を向上させるために
⑪医療者の役割

9）グループ発表

「緩和ケアについて」「病院見学について」「日本とオーストラリアの文化の違いについて」それぞれのグループが 3 項目の学びについてグループでまとめたもの(A4 用紙 10 枚程度)を発表した。「緩和ケアについて」「病院見学について」は、今回の研修で、日本の緩和ケアが確実に進んでいること、緩和ケア病院の見学では「サンクチュアリ(聖域)」という部屋があり、どの宗教の人でも心休まる時間を持てる部屋があることに、多民族国家であるオーストラリアの特徴も知ることが出来たとまとめた。また、「日本とオーストラリアの文化の違いについて」については「文化とは、一人ひとり違う文化がある、それぞれの文化を踏まえる事でその人の暮らしを支える看護ができる」と学生はまとめた。

d)モナッシュ大学の看護学科の取り組みオーストラリアの文化・看護について講義を受けている様子

Ⅳ．病院見学について

1）フランクストン病院見学（病床 454 床）

フランクストン病院は、ペニンシュラにおける主要病院である。1941 年に開院し救急救命部、産婦人科、腫瘍専門病棟、ICU、精神科、コミュニティヘルスセンターなどを有している。

ペニンシュラヘルス全体では約 850 名のボランティアが活動している。病院内では以下の内容について説明を受けて、院内を見学した。

①オーストラリアにおける看護師の資格の種類更新制度について

②フランクストン病院の地域における位置づけ、役割

③フランクストン病院の特徴

④フランクストン病院における看護師教育の概要

⑤オーストラリアにおける看護師の役割の変化について

2）緩和ケア病院（Peninsula Home Hospice）見学

この施設は独立型の緩和ケア病棟で、15 床の入院ベッドを持っている。主な入院目的は症状コントロール、レスパイトケア、退院に向けてのリハビリと評価、ターミナルケアと説明を受けた。

①緩和ケア病棟を見学し、緩和ケアに関わる医療者の関わりまで見学の中で学ぶことができた。

②ダイニングルーム、多目的のアクティビティルーム、Sanctuary という憩いの場があり、患者や家族の安らぎの場所となっていた。

3）モナッシュ大学看護学生との交流について

モナシュ大学の看護学生４名が参加し、本学の学生と交流会が行われた。交流会では、モナシュ大学の看護学生を含む小グループに別れて、英語とボディランゲージを使いコミュニケーションすることができた。難しい話では通訳のヘルプを受けながら交流した。モナシュ大学の看護学生は、ミャンマー出身で卒業後は母国に帰り難民の支援をしたいと考えている人や、子育てをしながら学んでいる学生などさまざまであった。また、モナシュ大学の看護学生は、平均 4～6 時間/日の自己学習をしており、本学の学生は驚きとともに、時間管理の方法など学び多き時間となった。

e)モナッシュ大学の看護学生と本学の学生との交流

f)ロレイン学部長より、今回の研修の学生リーダーを務めた星原さんへ修了証と記念品授与

Ⅴ．修了式とさよならパーティー

①Ms. Lorraine Walker Head of Campus Nursing and Midwifery（ロレイン学部長）よりスピーチ、修了証と記念品を授与された。

②福岡看護大学学生によるダンス

感謝の意を込めて「愛のフォーチュンクッキー」の英語版の歌詞付き動画を流しながら、学生が踊りを披露した。アンコールでは参加者も含めてみんなで踊り、楽しい時間を過ごした。

g)学生によるダンス

h)メルボルン市内の様子

Ⅵ．休日の過ごし方（メルボルン市内観光）

ホームステイ先のファミリーと、イチゴ狩りや動物園に行き、観光をすることができた。ホームステイ先のファミリーの計画がない学生は、教員とともにメルボルン市内を観光した。

Ⅶ. 帰国後のアンケート結果

事前のオリエンテーション、研修期間、研修内容について、以下の項目について学生に質問した。12名に配布し12名分を評価した。

1. 事前オリエンテーション（図1）

「文化について」は9名「ホームステイについて」は10名、「研修プログラムについては」11名が理解できたと答えた。事前学習とともに、下稲葉先生とのスカイプによる対話が、学生は研修先の理解につながり、不安も軽減したと考える。

2. 研修期間（図2）

「短い」と答えた学生が11名であった。日にちが経つにつれてホストファミリーと会話や信頼関係も深まり、貴重な時間という認識が芽生え、「短い」と回答した学生が多かったと考える。

3. 研修内容（図3）

「講義」ホストファミリーについて」「研修中の生活」11名の学生が満足と回答した。「病院見学」は10名の学生が満足と回答した。

一方「修了式・さよならパーティー」「看護学生との交流」「英語レッスン」では4名の学生がまあ満足だったと回答した。今回の研修は初めてあったが、モナッシュ大学が作成された研修プログラムの内容に、学生は満足した・まあ満足したという結果が得られた。

4. 研修成果についてのアンケート結果（図4）

「健康問題や看護の役割を考える力」「環境適応力」「語学力」「コミュニケーション力」「社会性、協調性」について、5段階評価で、研修前：●、研修後：●で印をつけて、それぞれを線で結んでレーダーチャートに記入してもらったのを点数化しまとめ、全員の平均を一つのレーダーチャートにしてまとめた。

研修の成果について、「健康問題や看護の役割を考える」は研修前より研修後が平均1.3ポイント上昇した。「環境適応力」は研修前より研修後が平均1.9ポイント上昇した。「語学力」は研修前より研修後が平均1.4ポイント上昇した。「コミュニケーション力」は研修前より研修後が平均2.1ポイント上昇し、5項目の質問の中で、最も研修後の値が高値となった項目であった。「社会性・協調性」は研修前より研修後が平均1.5ポイント上昇した。全ての項目において、海外研修前より研修後のポイントが高い結果となった。

5. 自由記述より以下の意見があった。

①自分が考えをもっているように、その人の考えもあってこういう考え方をもっている人がいると考えられるようになった。

②新しい土地で、様々な文化や土地柄を学ぶことができて、とても充実した貴重な体験となった。

③行く前より海外に興味が出てきたし、英語を話すことが楽しく、話すことに自信がついた。他文化（オーストラリアの文化という意味の他文化）を受け入れることに抵抗が無くなった。

アンケートからのまとめは、学生は特に「コミュニケーション力」はホストファミリーと毎日の会話などから、英語力が上達したと実感した学生が多く、値が上昇したと考える。また、アンケートより、研修中の日々の生活や講義・病院見学などの体験を通して、学生は自分を振り返り、貴重な体験だったと評価したことは、今後の学習や実習にも活かされる事も期待できる有益な結果であると考える。

アンケート結果

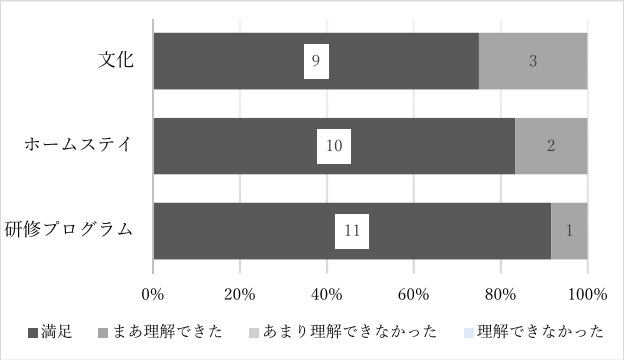

図1. 事前オリエンテーション（n=12）

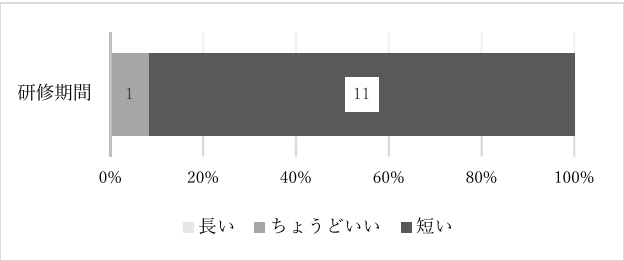

図2. 研修期間について（n=12）

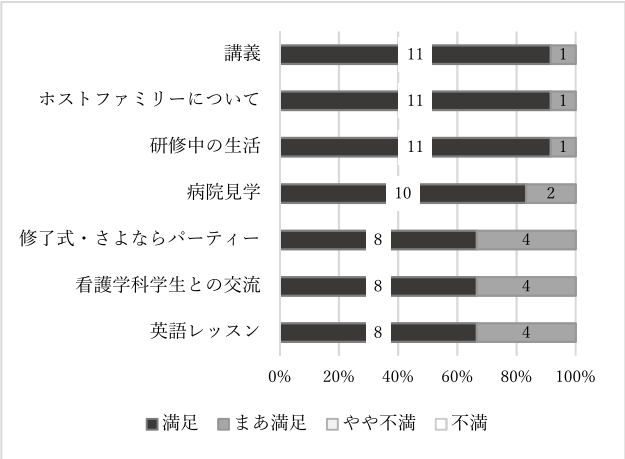

図 3. 研修内容について（n=12）

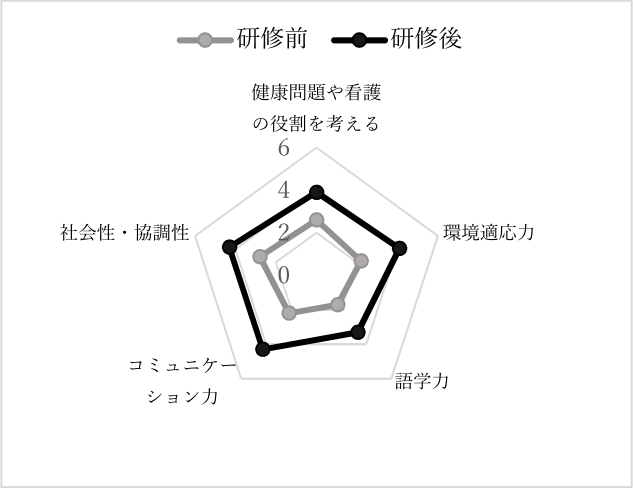

図 4. 研修の成果について（全体の平均値）

Ⅷ. 今回の研修プログラムの成果と今後の課題

1．研修の成果

①日本とオーストラリアの文化の違いや考え方の違いについて講義や、看護学生との交流などを通して学んだことや、英語で表現する日々をなど様々なことを経験した。

②現地の看護・医療・福祉に関しては、緩和ケア、well-being に関するケアについては、病院・緩和ケア病棟の見学とともに講義、グループワークで学ぶことができた。また、広大な大地でコントロールされているオーストラリアの医療ケアシステムについても理解できた。

③研修プログラムでは、学生が自分でホームステイ先と大学間を公共交通機関や徒歩で通学・帰宅させていたため、それぞれの通学路での問題解決は個々で行う必要があり、学生の自立性を養うことができたと考える。しかし、初めての海外研修で、12 名全員の安全を確保するためには、本学教員とモナシュ大学教員が協力し、学生一人一人の毎日の通学に関するサポートが重要であった。

④研修の日程を変更することなく、全てのスケジュールが遂行できた。モナッシュ大学の受け入れ態勢が整っており、アレルギーを持った学生がホームステイの変更が必要になった時、モナッシュ大学の海外研修担当者が迅速に対応頂き、スムーズに移行できた。

⑤今回、トランジットの時間が長かったが、問題となる学生もおらずグループ行動し、各自が海外研修の自覚を持って行動できた。また WiFi 接続と LINE グループを作成したことは有益だった。

2．今後の課題

①学生のオリエンテーションで、ホームステイ先に帰宅後はすぐに引率教員に連絡するように指導していたが、連絡なく、教員から連絡を入れることが多かった。連絡体制は毎日確認する必要がある。

②ホストファミリーに対しての、学生の情報が正確な情報ではなかったため、ホストファミリーを変更する事態となった。今回は、大事には至らなかったが、重要な事項であるため、一度書類を保護者にも確認してもらうなどの確実な記載が必要である。

③ホームステイ先が高齢化しており、土日も何かを負担してとは言えない状況である。あらかじめ、土日をどうするかの事前に検討することが重要と理解できた。

④体調不良者が出たが、受診とまでには至らなかった。教員やスタッフの素早い対応と研修を継続するか否か等、短時間での打ち合わせ、引率教員が、別々に行動せざるを得ない状況も多いため、それぞれが行動を把握する体制は重要であった。

今回、本学で初めての海外短期研修を通して得られた成果と今後の課題を再検討することで、今後の海外研修が一層良い研修に繋がると考える。

最後に、11 日間の海外研修が無事に終了したのも、モナッシュ大学の国際交流担当者、モナッシュ大学看護学科講師の下稲葉先生、本学の国際交流推進委員、引率の教員、参加学生・教員、皆様に深謝申し上げます。

Report on results of short-term overseas training at Fukuoka Nursing College 2019

Keiko Miyasaka[1)], Keiko Kubota[1)], Tsuyako Ohkubo[1)], Rie Iwamoto[2)], Mami Miyazono[1)], Keiko Morinaka[1)], Satoru Haresaku[1)], Tomoko Oshiro[1)]

1) Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing International exchange promotion committee members 2) Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing, Department of Nursing, Division of Support Nursing

Keywords: overseas training, multicultural society, nursing culture, English communication.

The purpose of this training is to learn about the daily lives of people in a multicultural society that cannot be experienced in Japan and the importance of understanding culture (cross-cultural) in nursing, and to learn about the practice of nursing in Australia, a country that has advanced nursing. As a purpose, in the second year of school opening, the college conducted its first overseas training in Australia. Here, the results of the training will be reported and issues for future training will be examined.

There were 12 students participating in the training. They all experienced orientation before the training, lectures at Monash College, hospital tours, and interaction with nursing students. It was felt to be valuable to set up an opportunity to speak directly with Lecturer Shimoinaba of Monash College using via Skype. A student questionnaire survey was conducted after the overseas training. All students were able to understand the prior (3 items). In addition, during the entire training period, 11 students (92%) felt that they were “short” and “we wanted more”. The training contents (7 items) were evaluated as “satisfied” for all items. One of the reasons for this satisfaction was that the conversations with the host family increased as students spent more time with them, and their confidence in their English skills increased.

Some of these students learned about medical care and culture in comparison to Japan, and some students wrote in a questionnaire that they had no resistance to accepting other cultures. In addition, we think that the training contents such as visits to hospitals and palliative care wards were well balanced. Students are required to make contact immediately after returning home, to keep in close contact with the host family even if sufficient adjustments are made, and the aging of the host family. There was a need to consider how to spend holidays.